

地名「三陸地方」の起源に関する地理学的ならびに社会学的問題

—地名「三陸」をめぐる社会科教育論 (第1報) —

米地文夫*・今泉芳邦*

(1994年6月30日受理)

はじめに

著者の一人米地 (1991, 1993 a, 1994) はこれまで、北上平野 (盆地)、北上山地 (高地) および奥羽山脈などの自然地域名称を中心に、これらの名称の自然地理学的意味や地理教育上の問題点などを取り上げて検討してきた。一方、今泉 (1984 など) はいわゆる三陸海岸の漁村の社会学的研究を進めてきた。また、両名らは共同して三陸海岸の漁村社会と地形など自然との関係についての研究 (今泉・米地・池田 1994 など) および地名の社会学ならびに社会科教育学に関する研究 (今泉・米地 1994) も進めている。

今回取り上げる地名「三陸地方」は、前述の三つの自然地域名称とは異なる性格をもつ。すなわち、「三陸地方」という地域名称の問題は、近代日本社会のなかで地域がもつ意味や、現代社会における地名が地域イメージの形成に大きな役割を果たしていることと関わって、興味深い問題を内包する。また、地理教育ないしは社会科教育に関していえば、現実の社会においては、地名「三陸地方」は普通に使われているにもかかわらず、学校教育の場では、ほとんど使用されていないという特異性を取り上げた。

I. 地名「三陸地方」の地名学的性格

1. 固有名詞部分「三陸」の性格

山口 (1967) はすべての地域は自然地域と文化地域とに二分される、とし、したがって、すべての地名も自然地域名と文化地域名とに区分される、とした。文化地域として同書で主に取り上げられているものは、行政区域名と歴史地名である。(山口はこの両者の関係については触れていないが、重なり合うもの=すなわち歴史的行政区域名とそうでないものがあるようである。)

三陸については東北の歴史地域名称を示す図 (図1) において、三陸海岸 (地方) とあり、三陸海岸も三陸地方もともに歴史地域名であるとともに文化地域名であると山口はみていることがわかる。

しかし、筆者らは「三陸」が、この文化地域名もしくは文化地域名称 (山口 1958) という範

* 岩手大学教育学部

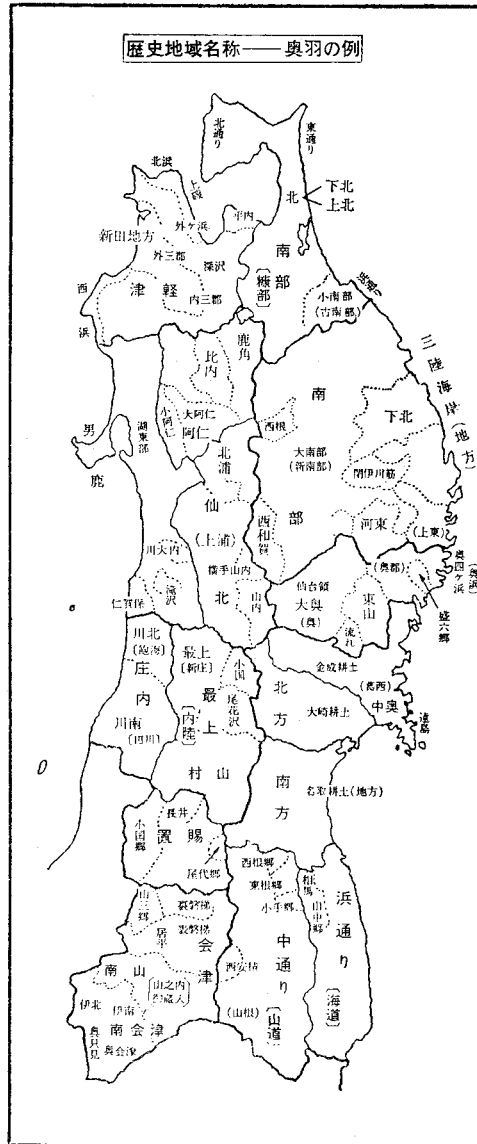


図1：東北の歴史地域名称，山口恵一郎（1967）による

疇にはいるか否かについては疑問をもった。そして、仮説として「三陸」は社会的地名というべきもの、つまり筆者らの分類の「社会地域名称」ではないか、と考えた。一方、現在、社会科学ないし地理教育の場における「三陸」の扱いは、「三陸海岸」や「三陸沖」など自然地名ないしは自然地域名称としてのものが多い。

筆者らが仮説として考えた地域名称の分類では、次の三種となり、「三陸」も、この三つの分類項目のいずれか、もしくはそれらの複合したものになると考えた。

自然地域名称

社会地域名称

行政地域名称

以下の議論は、この仮説の検証でもある。

2. 海岸と「三陸地方」との関係

さきの図1には海岸地域を示すものとして、津軽の西浜、北浜、上磯、いわゆる小南部の浜通り、以上陸奥、奥四ヶ浜（奥浜）、遠島、以上陸前、なども記入されている。

筆者らはこのような海岸の地域を示す地名は、山口のいう文化地域名（筆者らの分類では「社会地域名称」）であるが、それとともに自然地域名である側面も持ち、特に成立の新しい地名「三陸地方」の場合は、後述のように津波という自然災害と深く関わっているものなので、自然地域名としての性格も帯びたものと考えられる。

筆者の一人米地（1993b）は、江戸時代までの日本人には、国内の山々の連なりに山脈という概念を与えることは殆ど皆無であった、とした。それは、平野部を除けば広域的な自然地域名がほとんどなかったと、自然地域名称一般に拡げていえるのではないだろうか。したがって海岸についても、小規模なものを浜、浦、磯などと呼ぶことはあっても、「○○海岸」として広い範囲を指すことはなかったといえよう。まして、住民にとっては「○○浜」や「○○浦」の住民という意識はあっても、のちの「三陸海岸」のような広い海岸地方の中に住んでいるという意識はなかったものらしい。（近代においては、例えば「湘南海岸」などという地名が、浜や浦に当たるものにつけられる場合があるが、スケールの違うものなので、ここでは扱わない。）

すなわち、自然的には一括できるような長い海岸線に沿う地域の住民の間には、小さな浜や浦の漁村社会への帰属意識はあっても、その長い海岸を包括する地域社会はほとんど成立しておらず、そのような社会に帰属しているという意識は希薄もしくは皆無であったといえよう。

3. 構成と広がりによる地域名称の分類試案

筆者らは、地域名称はその構成と広がりによって次のように分類できると考えている。

S：単一地域名称

S-1：全域カバー型 例えは出羽国

S-2：局地型 例えは出羽山地

P：複数地域名称

P-1：全域カバー型 例えは奥羽地方

P-2：局地連結型 例えは奥羽山脈

単一地域名称とは、一つの地域名称のみが冠せられたもので、そのうち全域カバー型は、その単一の地域全域を意味する名称である。例えば出羽国がそれである。局地型は例えば出羽山地のように、本来の「出羽」国の一部について用いられるものである。複数地域名称とは、二つ以上の地域名を合わせ用いたもので、全域カバー型の例えば奥羽地方のようなものと、奥羽山脈や常磐炭田などの局地連結型すなわち、それぞれの地域の一部分ずつにまたがっているものがある。

このなかで、現在用いられている「三陸地方」はP-2：局地連結型に属する。しかし、はじめから、そのような地域名称であったのか、などについては、次章で検討する。

II. 地名「三陸地方」の起源と明治期の用例

1. 地名「三陸」の成立

他のほとんどの旧国名とは異なり、「陸中」など東北の各国名は新しく、明治元年十二月七日、それまでの「陸奥」国が、磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥の五ヶ国に分割され、「出羽」国が羽前、羽後の二国に分かれた際にできた。「三陸」は、このうち陸前、陸中、陸奥の「陸」のつく三ヶ国から名付けられた新しい地名である。つまり近代の地名ということになる。このことは、あまり知られていない。例えば、岩手大学の学生に、この「三陸」という地名の生まれた時代を聞いてみたら次のようであった。

古代：8名

中世：25名

近世：40名

近代：8名

計 81名

(1994年4月21日調査)

対象学生は教育学部の2～4年次学生で、社会科専攻ないし専修のものが、うち47名、正答率は他の学生の集団とほとんど変わらなかった。上記のように、「近代」と答えた者は一割弱であった。このことは、学生の知識の低さを示すものとはいえない。むしろ、一割程度の正解率でも、世間一般の常識からみれば、正解者が多いといえるであろう。なぜならば、古代以来、旧国名はほとんど変化せず、陸奥からの出羽の分離などの僅かな例外を除けば、いわば不変の地域単位であったから、国の名は古くからあり、それを纏めた呼び名が後世に生まれたと考えるものはあっても、近代に国名もそれらを纏めた呼称も生まれたとは考えられないという方が、むしろ常識的なのである。

ところが一挙に五つの国を増やすという大きな変革を、しかも戊辰戦争の終結後間もなく、まだ北海道には榎本政権が半独立的に存在しているような、新政府の体制すら整わぬうちに、このような改変を行ったのは、きわめて不自然である。

もちろん、それまでの陸奥や出羽は大きすぎたので、分割により他の諸国のサイズに近づいたことは確かではあるが、江戸時代の藩領の範囲は旧国のそれに合っていたわけではなく、例えば会津藩は陸奥と越後にまたがっていた¹⁾。国が大きくとも多くの藩に分ければよいので、実

